

異文化理解における無自覚な信念の解明への関心を促す

学習シナリオの開発

Learning Scenario for Awareness of Unconscious Belief in Intercultural Understanding

伊藤 亜沙利¹⁾, 松田 憲幸¹⁾, 小川 泰右²⁾, 京極 真³⁾, 瀬田 和久⁴⁾, 池田 満⁵⁾
ITO Asari¹⁾, MATSUDA Noriyuki¹⁾, OGAWA Taisuke²⁾, KYOGOKU Makoto³⁾,
SETA Kazuhisa⁴⁾, IKEDA Mitsuru⁵⁾

S171005@center.wakayama-u.ac.jp, matsuda@sys.wakayama-u.ac.jp,
taisuke_ogawa@med.miyazaki-u.ac.jp, kyougoku@kiui.ac.jp, seta@mi.s.osakafu-u.ac.jp, ikeda@jaist.ac.jp

- 1) 和歌山大学システム工学部, 2) 宮崎大学医療情報部, 3) 吉備国際大学保健医療福祉学部,
4) 大阪府立大学現代システム科学域, 5) 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

1) Faculty of Systems Engineering, University of Wakayama,

2) Faculty of Medicine, University of Miyazaki Hospital,

3) School of Health Science and Social Welfare, Kibi International University,

4) College of Sustainable System Science, Osaka Prefecture University

5) Japan Advanced Institute of Science and Technology

キーワード：異文化理解, 信念対立, 学習シナリオ

1. 研究の背景と目的

近年のグローバル化にともない外国人労働者や留学生が増加し日本国内においても外国人と接する機会が増加している。あわせて、文化の違いから意見の食い違いや衝突が発生する場面も増加している。そしてこれらの衝突は、対立や誤解をはじめカルチャーショックの原因となっている。異文化の間では、歴史的または文化的な背景の違いなどから、相手の考えていることが理解しづらく対立が起きやすい。

この意見の食い違いや衝突は信念対立と呼ばれる。信念対立は、自分にとって常識的なものを絶対化し、他国の異質な行為を理解できず、自分の理屈でその行為を勝手に解釈するために生じる。そのためお互いが無自覚に絶対視している信念に気付かせることができれば、それまでの対立は、それまでとは同じ形ではなくなり、重かった悩みが軽減するとされている。このような解消方法を信念対立解明アプローチと呼ぶ。

信念対立解明アプローチは、解明フレームと自問自答により自らの信念の背景を解明して、自分の信念は正しいとは限らないと疑う可能性をつくる。しかし、自文化にも独特のルールが存在していることを受け入れられない人にとって、無自覚な信念の解明は容易でない。文化に埋没すればするほど、そのルールを意識することは極めて難しい。

このような問題を解決するために本論文では、我々は自らの判断について無自覚に絶対視している信念が無限に存在していることに気づかせる研修を検討した。異文化と自文化に対する思考を記述して、これについて外国人とディスカッションし、自らの判断について無自覚に絶対視している信念を掘り起こす。思考の記述は、異文化に対して違和感を指摘する容易さと、自文化について絶対視していることを指摘する難しさとのギャップを理解することで、無自覚な信念が存在することに気づかせることができる。さらにディスカッションは、外国人から自文化についての違和感を突き付けられることで無自覚の信念は無限に存在していることを理解すると期待できる。最後に理解を深めるため、自らの経験から異文化との対立を記述し、自らが無自覚だった信念を解明する。無自覚の信念が存在していることを理解し、実際に対立が起きた際に、無自覚の信念を解明することで対立が解明できることを理解することを目的とする。